九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マンガ学のすゝめ

日下, みどり
九州大学比較社会文化研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/16800

出版情報：西日本新聞, 2002-01-25. 西日本新聞社
バージョン：
権利関係：

マンガ学のすすめ その3

日下みどり

二世マンガ流行の効果

親子の絆を深めるか？

最近二世マンガや続作マンガが増えている。『キン肉マンⅡ世』はアニメ化され、『シティーハンター』の続編『エンジェル・ハート』、上海版『北斗の拳』たる『蒼天の拳』も、それぞれヒットしている。

中でも目を引くのが、犬ロマンの『ウイード』。『銀牙』（熊犬銀が仲間の犬たちと人食い熊「赤カブト」を倒す物語）の二世マンガである。書店でも平積みとなっていて、関連本も売れている。銀の子ウイードの成長の物語だが、前作を知らない新しい読者も食いつくぐらいしっかりできている。特に次回へ続ける「引き」の上手さは抜群だ。

だが、やはり一番の魅力は、銀とかつての仲間たちが登場することだろう。いきなりあの「スケコマシ」のスミス（美男犬だったらしい）が、ウイードたち子犬の前で「大人の責任」を見せて死んでゆく。続作のすごいところは、往年の大スターをどんどん殺せることだろう。中でも悲痛なのは準主役のジョンの死。悪の巨頭法玄との壮絶な戦いの末、アルプスの山中でジョンはウイードたちに看取られながら息絶える。そして、ジョンのなきがらを弔うのはいまや年老いて視力を失い、痴呆がはじまった名脇役のベン。なつかしい友とも分からず（哀しい）、ジョンのなきがらを背中に載せたベンが浪花節を唄いながら歩み去るシーンは圧巻。このくだりを読むだけで、かつてのファンは涙、涙…だろう。

▼▽▽

親子の断絶、家庭内暴力など、家族の崩壊が描かれている点も時代の変化を反映している。わずかの間に日本の家族関係もずいぶん変わったものだ。重要な脇役の狂四郎にいたっては、親の愛を知らずに育ったため人を信じず、反抗する子犬たちのリーダーになっているという設定。犬の家庭内暴力って何だと言われると少し困るが、これは犬の世界を借りて人間のドラマ（男の生き様。メスはあまり出てこない）を描いているのだ。読者もその辺は分かって読んでいるので問題はないのである。

二世マンガ現象は映画でいうと『猿の惑星』のようなものだろう。映画ファンは「なんといっても初編が一番。あれを超える作品は生まれないよね」といいつつも、続編ができれば見に行かずにはいられない。おおむね初編がいいと続作も面白いものだ。

▽▽▼

これを、新作が生まれにくくなった行き詰まりのあらわれ、と見る向きもあるだろう。そうかもしれない。今は時代の転換期だ。古きものは去り、新しきものは未だ来たらぬこの時、世の中全体に回顧・リメイクが流行っている。辛抱して力を蓄え、次のジャンプの準備をする時かもしれない。幸いマンガは、この五十年で回顧に耐えるほどの「財産」を築きあげた。「貯金」が使えるなら使えばいいのだ。

どれもあの毎週六百万部を売り上げた『少年ジャンプ』のピークのころの二世たちだ。あれは読者にとっても黄金時代だった。名作を惜しげもなく毎週読み捨てるぜいたく。まったく、毎週がお祭りだった。幼年期に読んではまった楽しさは、しっかりと記憶にインプットされている。それを思い出すだけでも読む価値はあるだろう。

子供は十年で大人になる。二世マンガは子供にとっては新作、大人の世代には懐かしのキャラクターと出会えるダブルで「おいしい」作品なのだ。そしてこの場合、より面白く感じるのは、かつての物語を夢中で読んだ親の世代の方だろう。マンガは成長し、読者も育った。マンガは親子二代が読んで楽しめ、絆を深めることのできる共通の話題となったのである。

（くさか・みどり、九州大学大学院教授）

©日本文芸社・高橋よしひろ

文化